



Title	《見知らぬ女性がのこした空》 《見知らぬ女性からのおすそわけ》
Author(s)	前田, 博子
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75353
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《見知らぬ女性がのこした空》《見知らぬ女性からのすすそわけ》

前田 博子 仁愛女子短期大学 金沢美術工芸大学大学院

2018年2月福井市美術館で開催した個展『engagen—衣服が記憶するわたしたちの過ごした時間—前田博子展』より。

空き家に遺された布や衣服をそっくり頂戴し、これらを用いて作品を制作した。布をつなぐこと、布を見せること、そして布を渡すこと。それは、私の作品制作が目標としている、ヒトとヒト、ヒトとモノ、ヒトとコトがつながる活動である。

《見知らぬ女性がのこした空》

布や衣服を、今は亡き主に向けてつなぎ見せたインスタレーション作品。彼女はいつか使おうと取っておいた生地や衣服を畳み、タンスや収納ケースに保管していた。彼女が暮らしていた家は借家であった。「捨てるものだから、使えそうなものがあれば持って行っていいよ。」と家主に言われ、私たちは会ったことのない見知らぬ女性が遺した衣服、布、糸を余すことなく頂戴した。それらを作業中の健康を考え、全て洗い、布の種類やサイズによって分類した。「自身が着ようと買ったもの」「自身が使おうと買ったもの」「いつか使えるかもと繊維工場などから貰ったもの」「何かわからないもの」の4つに分けられた。あまりにも多すぎる生地を見ていると、布は畳むことによって小さく収納できるが、これらがどれほどのサイズなのか、どのような柄域なのかを知るためには広げなければわからないことに気付く。見知らぬ女性が数十年かけて溜め込んだ生地の中には彼女自身も忘れてしまっているものがあるだろう。だから、それらを広げて彼女が集め、貯め込んだ生地の全てを

亡き女性に見せるために、作品制作を始めた。初めは彼女が暮らしていた地域で広げる。(図1) そのあとはそれらを人々が集う場を彩るものとして広げる。一辺6m×6m大きな布を十数枚制作した。タイトルには《空》という言葉をつけたかった。《見知らぬ女性がのこした青空》《見知らぬ女性がのこした曇り空》《見知らぬ女性がのこした灰色の空》と北陸らしい空になった。特に多かったものは「P下」と言われる加工前の白色の生地である。北陸を代表するポリエステル生地のP下を溜め込んでいた女性の気持ちはわからないが、繊維工場のB級品であることは間違いない。それらをいつか何かに使おうかと思っていたかは不明だ。



(図1)

《見知らぬ女性からのすすそわけ》

《見知らぬ女性がのこした空》で使用しなかった、使用できなかった糸、生地、衣服が一部屋分余った。これまでに女性が捨ててこなかったことを思うと私には捨てられない。これらを次の見知らぬ人々に分け、継承されてほしいと思う。そこで次に《見知らぬ女性からのすすそわけ》という

プロジェクトを実施した。このおすそわけは《見知らぬ女性がのこした布》《見知らぬ女性がのこした衣服》《見知らぬ女性がのこした糸》からなるがここでは《見知らぬ女性がのこした布》について記す。それは、余った布を色ごとに継いで、長い布をつくり、その上に展覧会リーフレットに使用したイラストをシルクスクリーンプリントしたものである。(図2)



(図2)

「継ぐ」という行為はかねてより行われていた。見た目はいかにも貧乏くさくなり、継がれた布は多く現存しない。だから、現在では「BORO」を収集すること、ましてや見ることも難しくなってきた。しかし私は継ぐことは、新たな布の物語のはじまりを提示すると考えている。《見知らぬ女性がのこした空》から始まった本作品はそもそも他者からのおすそわけによって成り立っている。このおすそわけは元来近隣住民との間で頻繁に行われていた地域コミュニティ形成の文化と言える。このコミュニティ形成の在り方を踏まえて、おすそわけされたものをおすそわけするのが、今回の試みである。私は、自分の作品制作において他者に物を譲る際には決して金銭を介さない事を条件としている。本作品は繕うこと、縫うことが、つまりその行為が金品の代わりになる。しかも今回は、繕い、縫いだけでなく、それによってつながれた布を他者が「切る」。(図3) 私はこれまで、なるべく布を切らないできた。それは田中忠三郎が母から伝えられた教えを、私もまた継承してきた

からであった。しかし切ることはつなぐことでもある、と考えられるようになってきた。「切る」ことで布は切断されるが、切られたことから、その切断された箇所が誰かとつながる場所となるだろう。つまり人は布を「切る」ことによって他者とつながる場所を持ち帰ることができ、残された場所はまた別の誰かとつながる場としては始めることができる。



(図3)

所有者が移ってゆくことでモノには新たな所有者に加えて、記憶も追記される。本来モノとは誰かが所有している。しかしわざわざ所有することに価値が見いだされなくなっているのも事実で、家にしろ、服にしろ私たちは借りることができる。しかし、モノを所有することで私たちは直すことを可能としている。直すことはモノに対しての敬意を含めた新たな物語のはじまりを教えてくれるものである。これから時代が移り変わり、モノと対峙してゆく中でモノ、コト、ヒトが積み重ねられる関係を築いてゆくために私たちはこれからの暮らしについて考えなくてはならない。その考えるための時間を与えてくれるのは、衣服や布を「畳む」ための時間ではないかと考えている。

引用文献

仁愛女子短期大学研究紀要第51号

衣服を介して口伝される衣文化の成り立ちと仕組みの考察

制作協力：(株)大晃 真空ラボ ヒュッテナナナ